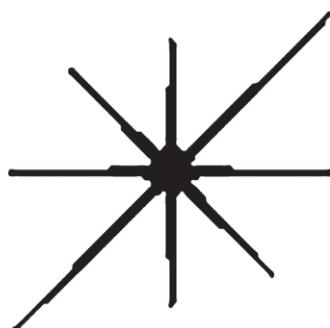


コメット通信 14

[21年9月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

断簡を装って

桑原喜一

日々の、泡、掬いあげられる(2020.1.11 - 2021.9.3)

落ち友メール

想い起こしている、ここ数日です

残欠五篇

奇しくも

野外劇

灰色の男

〈先ずは自助〉なる話法

傍白

返信遅れました、ワクチン接種、シロ猫帰る。及び、訂正、加筆と追記。

八月八日

シャットダウンする

落ち友メール (2020.1.11)

一昨年の九月のことですが、私も、

一階の屋根から落下しました。

二階のトイレの網戸が目詰まりし、内からは外せないで、屋根に登りました。高圧で吹き飛ばそうと、洗浄機を用いる、安易な手を使いました。

雨上がりには決して屋根には上がらない、で、通して来たはずなのに、半乾きの屋根、水を使えば足元が濡れるのを、迂闊にも、失念していました。

目の前を、噴射の勢いに、外れ落ちる網戸、受け取ろうとして、右足に力を入れた途端、スレート葺の凹凸とほぼ並行となって、運動靴のゴム底の濡れた凹凸は、滑り、バランスを崩しました。

落ちる。

抗うと余計な力が入る、と、瞬時に、無駄な抵抗はやめました。梯子は、植木屋さんがよく使う、梯子に一本脚を加えたものです。屋根に対しては九十度の、梯子に、「落ちる」を委ねました。まず梯子に体を委ね、滑り落ち、途中から地面に落ちました。

よくて救急車、と、

一瞬、思いながら落ちました。

右脇から、地面に落ちていました。

頭は、地面に触れていない。

試しに、手と足を動かしてみました。

起き上がれるか、試してみました。

歩けるか、試してみました。

痛みは、どこにも、感じられません。

左の脛に血が滲み、擦り傷があるのに気づいたのは、暫し、後。思うに、梯子に身を委ね、梯子が一本足の方向に倒れることで、また、左脛がアルミの梯子に擦れることで、また、身体が落ちた所は石垣の手前、地面には石ころもなく、幸いにして、落下の衝撃は土に分散され吸収されたようです。

翌日、診療所で診てもらいました。

歩いてもどこにも痛みがないので、様子見、ということになりました。数日後、内側の踝の下あたりが、青紫色に、鬱血していました。

それくらいで、この落下は、済みました。今でも、風呂上りに左の脛を見ると、少々、皮膚が赤くなっています。

想い起^っしてらる、^っこの数日です (2020.9.9)

9・4に、『パラダイス・ロスト』を観てきました。

8・29に行けなかったのは、心残りです。

*

映像作品への、手掛かりとして、印象に残っている場面をもとに思い巡らし、的外れかもしれませんが、少しばかり記します。

ストーリーのほとり、

〈対の(による)セッション〉という枠組みについて、です。

二つの要素からなる単体としての〈対〉のかたちは、
〈男・女〉、〈男・男〉、〈女・女〉、〈母・子〉、〈父・子〉、
〈役者・役者〉、
〈林の舞踏家・ステージの舞踏家〉、
〈役者・監督〉、です。
そして、
〈死(者)・生(者)〉、〈死・死〉、〈生・生〉、
〈虚・実〉、〈虚・虚〉、〈実・実〉、です。

これら〈対〉となった一組の単体は、それぞれが、
別の単体の要素の片方にもなり得て、気ままに入れ替わり、
あらたな〈対〉として立ち現れるというかたちにもなります。

時として、単体の要素は、〈対〉から分離し、
彷徨います。カメラだけが路上30センチほどを、
進んで行くかたち、も、とります。

そのため、映像としての人物は、
一人・二人・三人・四人(五人以上は、多にして、他)、
という構成が基本になっている、と、思えるのです。

たたかう理由 / ゼロからはじまる自分に / 会いに行く。

こうした〈対のセッション〉によって、
「ゼロからはじまる」は立ち現れ得るのだらうと、
苦し紛れに、想い起こしている、ここ数日です。

残欠五篇 (2020.10.10 - 2021.7.22)

奇しくも

コロナの淵の ひとり、
奇しくも、

観客は四人（上映最終日、午前の部、シネマテークたかさき）。

C列に、女性一人（60歳前後）。

D列に、われら二人（運転の、付き添いを兼ねてもらおう）。

F列に、男性一人（50歳前後）。

加えて、スタッフ（男性一人、受付の女性二人、いずれも、20から30代）。

ここから、私は

どのようなストーリーを、

紡ぎ出せるのだろうか。

路上を移動するカメラだけの 視線なら、

思い描けるような気はする。

但し、人はカメラの背後

姿を見せない、一人だけ。

ストーリーからは 弾き出され、

かろうじて 映る、

交差する軌跡のような 残像。

出会うことは、

稀な

ウロボロスたちの の

交差する、影。

Cの女 薄い灰白色の髪から 仄かな 憂いのようなもの（台詞なし）。

Fの男 煩悶の尻尾の影を なおも 追いかけている気配(台詞なし)。
スタッフ 一時の 流行り病「自分探し」なる台詞だけは口にしない。

野外劇

私は、未だに、〈わたし〉の、しっぽを追いかけて、ウロウロ。
マスク姿の、レンズ越しの眼鏡男、誰もがストーカーと怪しむ。
〈私〉のしっぽが、〈わたし〉を、強迫的に、追い抜いてゆく。

重なりつつ、ほぼ十年サイクルの、箱庭療法らしきひとり遊び。
翻訳ものは敬遠し、30代の中頃、雪の日は、着生蘭の花の匂い。
40代からは、半可通ゆえに依存症めく、部品集めの秋葉原通い。
粘土をこねて轆轤をまわす、真似事も混在する、50代初めの頃。

若者A…50代と記された紙切れを、右手がつかんでいる。

若者B…左のポケットを探ると、木片に数値40、が出てくる。

若者C…60代という文字が、掌で遊んでいる、やれやれ。

灰色の男

昇りつめた、灰色の男が、登壇する
盾にも矛にもなる、空っぽの入れ物

右目には、「総合的」というカプセル

左目には、「俯瞰的」というカプセル

小ぶりな、政治家の、小ぶりな、劣化の連鎖
言葉の劣化が、政治の劣化に、拍車を掛ける

「法」ですら、解釈で、改変する亡者は
矛と盾なる小道具を、こまめに利用する

小ぶりに笑みを浮かべては、小ぶりに、蚕食し
ここぞとばかり、形振り構わず、大鉈を振るう

塵、芥、悪臭まみれの、廃墟の、三叉路
魔女ならぬ、口裂け女が、マスクを外す

〈先ずは自助〉なる話法

- ・スピード感を持つて
- ・問題ない
- ・速やかに
- ・承知しない
- ・きちんと
- ・まさに
- ・直ちに
- ・真摯に
- ・丁寧
- ・しつかり
- ・誠実に
- ・させていただく
- ・いずれにせよ
- ・差し控える
- ・はつきりと
- ・(……………)

傍白

キタナイハキレイ、ハ汚イ
キレイハキタナイ、ハ綺麗

キタナイハキタナイ、ハ
綺麗カ 汚イカ

キレイハキレイ、ハ
汚イカ 綺麗カ

*

細波のような

騒めきの

わたし、は

言葉の

微弱な磁力を

感知しえないのか。

奪われたのか

隠されているのか

言葉、は

衰えたのか

失せたのか

自ら姿を隠したのか。

**返信遅れました、ワクチン接種、シロ猫帰る。
及び、訂正、加筆と追記。**
(2021.7.3-8.8)

話題は、変わります。

迷っていた、ファイザーのワクチン接種を、先月、受けました。

重い副反応はありませんでしたが、二回目は、どうなるか気がかりです。とりあえず、市販の解熱剤は、用意しておくつもりです。

接種を受けた理由は、三つです。

①入所している母親との面会が可能になれば「接種済み証明」が必要になりそう。
②通院先のQ & Aには「特にがん患者さんの場合は接種の意義がより一層高い」と、推奨。それでも、やはり、迷っていました。

受ける決意は、次の③によるものでした。

③五輪は、何がなんでも強行しそうだ、ということ。

このままいけば、五輪は誤輪に変じ、変異株見本市となりそう。また、強行は、結果的に、狂行にして凶行に、行き着きそう。

「三密を避ける」としながら、「Go To」キャンペーンを煽る。

移動があるがゆえに「密」が生ずるのに、子供騙しのような、経済優先策。

「水際作戦」とは言いながら、変異株も検疫を擦り抜けて、入り込んでいる。

「バブル方式」は万全を期し得ると、得意顔をした子供のように、公言する。

バブルはたやすく弾けるし、通気がなければヒトは死んでしまう、のに。

仮に「水も漏らさぬ」としても、水は常に蒸発する、のに。

粗雑な言語感覚しか持ち得ない人たちのすすめる対策なのだから、五つの輪は、鎖となつて、散らばり（五輪は東京変異株見本市に変貌する）という推測を、即座に「エビデンスがない」と断じて、それは、いつもの、口癖の類い、根拠のない言い回し。それこそが、儚く消えゆく願望と思惑、でしかない。

（「バブル方式」とは、

まさか、

ヒエロニムス・ボスの

「快樂の園」から想を得たわけでもあるまい）

（いかなる状況になろうとも

デルタ株の

次の 次の次あたり、

ゴリン・グリーン・グリーンなる

誤輪・愚輪・擬輪、株の

いずれか として、

晴れやかで 気弱な

「宣言発出頼み」を

先代から

受け継いではいても、

「東京五輪変異株命名宣言」の

「発出」は

なされはしないだろう、から

通称としてはあってもよい、だろう)

*

話題は、また、変わります。

二年三ヶ月、生死不明であった、シロ猫が生還しました、3月16日です。

薄汚れ、年寄りじみ、険しい顔つきをし、ヒトを恐れている、感じ。

警戒心が強く、物音に過敏で、ひとまわり小さくなった感じも、する。

家のまわりにおいて、餌だけは食べに来る「外猫」生活が、二ヶ月以上続く。

食べている時だけ、軽いブラッシングは、受け入れるようになる。

梅雨入り前、ようやく、穏やかな顔つきを見せるようになった。

梅雨入り後は「軒下猫」、呼び掛けに、声を発する場面も、すこしばかり増えた。

ところが、6月26日午後より、姿を消してしまった。

以前の、常習プチ家出であれば、と、願っていただいた。

雨が ふったり

陽が さしたり

私の体調 も

不安定。

7月2日、0時過ぎ、通用戸口前の足拭きマットの定位置に、

軒下猫としてうずくまっている。

食べる。

食べる、食べる、たくさん。

目脂、尻尾の付け根の黒い汚れは、感染症によるものらしい。抱きかかえようとすると嫌がるどころか、歯をむきだしにして威嚇する。手を噛まれそうで、病院に連れてゆくことが、出来ない。

たくさん食べて抵抗力をつける他はないようだ、と思いつつ、すでに三ヶ月半が経つ。

私はといえば、気力だけは失わないように、ただし極力省エネで、などと、相変わらずの、寝ぼけまなこの日々が続いています。

*

話題は、戻ります。

私の「生」は泡沫のようであっても構わないが、その場凌ぎで 行き当たりばつたりの政策は、世の人々にとって 悲喜劇で済みそうもない。

「国家資本主義」とかいうらしい体制の人民服の総書記にも

幸い 小振りではあるものの

どこかしら 似て、

筋金入りなのか叩き上げなのか

灰色の男は

影を喪って、

ハーメルンの笛吹き男じみて

破綻なり破滅へと、導きそう。

八月八日 (2021.7.23 - 8.16)

和は、

興行に墮し

金食い虫に蝕まれ

事前ゲームの

「お・も・て・な・し」

とはいえ

裏も表も あるらしく、

招致なる

駆け引きを 経て

輪も、

散けて

金輪となり

鎖に交じて

縛りとなり、

あれやこれや と

劣化を抱え込み

ままよままよ と

漂着した

炎熱列島、

スポーツ日和 は

夢のまた夢。

〔TOKYO 2020 +1〕

〈承知する〉

波及効果は、

プラスであれ

マイナスであれ

経済に 限るゝと、

思惑を

期待や願望の膜で

包み込んで、
賭けに賭けを
継ぎ接ぎする
手管の、

危うい綱渡り。

〈感染を避けて、の

ステイホーム 観戦〉

「東京の繁華街の人流は
開幕前と比べて増えていない」
組織の

大御所も、

口をそろえて

「直接的にも間接的にも
影響はない」と、
人々を

愚民扱いする。

祭りには

災いが

ウィルスのように

移り住んでいるから、

時に

祭は災に 転ずる。

祭典は

いずれ

災典に

姿を変えて、

記録されるだろう。

後々、

列島の

「後の祭り」なる

最大級の

一例の

史実として

記載されることにも

なり得るだろう。

それとも

予測はされているから、

些事として

私かに

記憶されるのみ、で

収束するのだろうか。

時おり、

泡ならぬ

球ものゲームの

放映を観ている

私も、

愚民化される

一人には違いないが、

比較にならぬほどに

精妙な

テクノロジーに

企まれて、

今も なお

ゾンビのように

蘇る

「二億総白痴化」だろうか。

その担い手は

思い付き程度のことを

切り札らしい

装いで 飾り、

副反応のような

困惑に

思惑を隠しつつ

チグハグに

なおも

不可欠な対策、らしく

たぶん、得意顔も

マスクに隠しつつ

臨機応変らしく
垂れ流しては、
遅ればせに
不評を察知し
慌てて
回収する。
お家芸と言うべき
失態、と
やはり
寄り添う
言い抜け、の
連鎖。

ヒト・モノ・カネ
の
共演は、
理念
組織
招致
運営
において、
X線照射のように
炙り出される。
凭れ
割り込み
貪り
蝕み
綻び
ひび割れ
驕り
侮り
腐れ
これらは、
目から鱗
の
負の遺産、

コロナ効果と言うべきか。
あるいは

トリプル狂宴と言うべきか、

ヒト・モノ・カネの

ロンダリング、

「擬似戦争」なる祭りの

「擬似」まで洗浄されたら、

すぐそこに

待ち受けているのは

廃墟、

廃墟、

廃墟、だろう。

夏バテ気味の

古い猫サク

出戻り軒下猫シロの

食欲は もどりつつ、

夜気は

微かな秋を

漂わせても、

耳目を驚かす

電腦ゲームの

バブルに

閉じ込められそうで、

始まりの

式典を

切れ切れには

観たものの、

終わりの それを

観ようという 気が

私には、

起こらない。

愚と

賢は、

混淆し

あいも変わらず
愚策と愚民を
再生産する と、
ひとり
眩く
私は、
一人の
愚者。

ところで、
唱えた人も怪しいが
「民度」なる
怪しい説は
早々と
姿を隠してはいるが、
射程範囲を広く持ち
精度もよさそうな
その名も
科学的衣装に身を包む
「ファクターX」説は、
今でも
どこかで
その「X」の解析を
続けているのだろうか
と
気になること、
しばし。
けれども
事態は、
それどころではない。

マスク外しの
間抜け顔 なのか
おどけ顔 なのか、
噛みつき亀 に

張りあって
演じていたわけでも
ないだろうに、

祭りの
後も

メダル噛みつき男が
世間を騒がしている。

お人好し とも
フレンドリー とも

持ち味 とも
自認して

いるのか
いないのか、

コロナ効果の
番外編 で

あろうが
なかろうが、
今や

事態は
「家庭内感染」と

「ステイホーム感染」が
分かち難く

混在している。
なのに、

騒ぎをよそに
「後の祭り」の

担い手たちは
しばし

ほくそ笑み、
それと知らずに

この列島を
泥舟ひよろかに変えつつ、
窓ひよろかに

一息吐いている
ことだろう。

移ろいは、
はやい。
炎熱は
去り、
雨
雨
雨の
雨雲の帯。
泥の、海。
遙か
南の
海面下では
人の
時間の
枠の外
悠久の営み
の
小ぶりも
小ぶり
吹き出物のような
ほんの
一呼吸、
泡立つ
灼熱
噴出するマグマ、
火山島が出現している。

注

【祭】 肉と又と示とに従う。示は祭卓。その上に肉を供えて祭る。……祭は人を祭り、祀は
巳(蛇)に従うて、自然神を祀るときまつの字である。
【民】 一眼を刺して害する形。……字は明らかに眼睛を刺割する形である。……民の起源は、
もと神につかえるものとして、その眼に刺割を加えたもので、たとえば楽人などもみな警師

であった。

【賢】 …… 叡^{けい}が賢の初文である。叡は臣すなわち目の眼精を、又（手）を加えて傷つけるもので、神に捧げられた徒隸^{とれい}をいう。臣や妾はもと神につかえるものであった。多才であることは、神につかえる重要な条件であり、……
〔字統 初版第四刷〕より）

シャットダウンする

(2021.9.3)

思惑の

泥舟の

潰し合い、の

吹き出物 として

噴火口が

その姿を晒した、日に。

執筆者について——
桑原喜一（くわばらきいち）

一九四九年生まれ。小社刊行の詩集には、『散文』がある。